

第2回 食と命の教室 2024.3.16

■はじめに

ここ1ヶ月の間があって、この国はいったいどうなっているのだろうか？と思いませんか？TVで録画してあった上杉鷹山の番組を観たのですが、上杉鷹山、知ってますか？今で言えば米沢市の大名ですね。上杉家の7代目か8代目の人で、藩政改革をした人ですね。かつてケネディ大統領、1960年代にベトナム戦争を始めた人なんですけど、「私の政治の師匠は上杉鷹山なんだ」と言っていたんですね。外国の政治家は日本の歴史を勉強していますね。

かつて日本で2000円札を出しましたが、フランスの元大統領のジスカールが「日本は何をやっているんだ、ロマンポルノをお札にしたのか？」と。源氏物語がロマンポルノの世界だ、と揶揄されたんです。ということはジスカールという大統領も日本の文化を学んでいるという事ですよね。

私の師匠の「※むのたけじ」さんが言っていたけど、「日本人が日本を知らない」と。「日本人は世界に行った時に外国人と対等に語れないだろう」と。というのは、フランスもドイツも日本の文化を学んでいるんです。第二次世界大戦の時に、英米を鬼畜米英と決めつけてシャットアウトしたんです。アメリカは反対に日本を学ぼうという勉強熱が高まったそうです。日本は反対に閉鎖しちゃったんですね。

「※むのたけじ」…大正4年(1915年)~2016年)。秋田県の小作農民の家に生まれ、働いても働いても貧困から抜け出せない環境で育ったことで、「社会の仕組みを変える」と21歳で報道の世界に入る。しかし、戦時中、記者でありながら真実を書くことが出来なかった悔恨から、「国民を裏切ったけじめをつける」と終戦の日に退社。秋田に戻り、読者と共に作る事を目指し週刊新聞「たいまつ」を創刊する。常に生活者の視点から日本そして世界の姿を見つめ、農業、農民運動の在り方、反戦・平和を訴え続けたジャーナリスト。

アメリカの国の凄さというか下心というか、戦争は日本と戦って勝つ事を前提にやっているわけです。だから戦争が終わる前に準備をしていた。だからマッカーサーがやってきた時に、すぐに日本の教育はここがダメだ、財閥は解体だ、と出来たのは研究していたから出来たわけです。そういうことを日本は今も引き継いでいる。日本の教育は、つまり教えないという教育ですね。ヨーロッパの格言で「人間は食べるもので出来ている」という事とかを日本では教えない。

今日も TV を見ながら、マクドナルドがシステム障害で食べなくなった、とやっていたんですが、「そんなもの食べなくて良いじゃないか！」と我が家では盛り上がったんだけどね(笑)。何を食べたら良いのか、という根本的な事を教えないからわからないんだよ。だから CM とかマスコミの情報だけが入ってきて、日本人の医療費は 42 兆円。税収が約 70 兆円ですから、それに対して半分以上が医療費なんです。

それに対し、本当は命を作っているのは食べ物なのに、農産物は 10 兆円いってないんですよ。おかしいと思わない？命を生み出すものより修繕する方にお金を使っちゃっている。医療も偏差値が高い人が医学部に行くとかね。本来の根本的な所に価値感を置かない。それがどこで根本的な問題が起きているかという、教えないという日本の教育だな、と思ったんです。

昔、フランスに行った時に「正しいな」と思ったんですが、日本人はスーパーに行くと、どれが良いのか選ぶんです。すると、私も若かったから、昔の事ですから、向こうの人が「食べ物は選ぶんじゃない」と。若かったので素直じゃ無かったので「何でか？」と聞いたら、「食べ物は天からの恵みだ。だから選ぶんじゃない」と。なるほど、そういう価値観があるんだな、と納得したんです。

そういうのは見えない事なんです。日本人は選んじやう。例えば牛乳なんかも賞味期限がある。ちょっと横道にそれるけど、昔は製造年月日だったんです。これもアメリカの圧力のせいなんです。アメリカは日本に食品を売りたい。すると輸入になるから時間がかかる。そうすると製造年月日表示は不利だから非関税障壁だといわれる。余計なお世話だよ(笑)。

ということで、昔はどこの国でも製造年月日だった。で、牛乳など一番古いのが手前に並ぶ。そうすると向こうの人は偉いなと思うのは、一番手前からとるんです。「だってそうでしょ。次、いつ誰が来るかわからないけど、今、私がこれを買ったらまだ飲める。そうしたら次の人が次のものを買えて飲めるでしょ」と。お～、フランス人は筋が通っているな～と。

40 年前の話だけど、フランスの家庭訪問したら、食事に時間をちゃんとかけるんです。みんなで作る過程を楽しむ。食器を用意して材料を切ってというのも含めて食事なんですね。そして、今日何があったかなどしゃべりながら食べる。それが文化。今の日本はエサになっちゃっている。調理も雑事という事になっている。それで向こうは「天に召します我らの神よ、今日の恵みに感謝します、アー

メン」とか言ってから食べる。普段の食事が天から、つまり大地、自然から戴いた命だという事をたたき込まれるんです。

日本は違うんです。島根大学だったかどこかの先生が荒れている家庭を家庭訪問したところ、食事を食べていない、食べていても菓子パンとかジュースで暮らしている。食事は人間形成でとても大事だと思うんです。

ということで、人間が生きていく上で大切な事が教えられない。で、TVで国会答弁を見ていると話にならない。答弁になっていないですね、あの首相は。あと、もう1つ感じたのは、戦前の日本と同じ形で進んでいるな、と思う。怖いな、と。私の叔父さんは飛行機乗りで撃墜されて太平洋の藻屑となったんですが。半藤一利って知っていますか？学者とは違って、当時の陸軍だった人とか1人1人をインタビューをして生きた歴史をまとめているんです。今の日本は歴史を正しく教えていない。1867年に明治政府になったとかはどうしても良いんです。

あと、この前亡くなった指揮者の小澤征爾は満州で生まれて、板垣征四郎と石原莞爾の満州国を作った中心人物2人の名前をとって征爾という名前を付けられたんです。ちなみに、シナ事変は戦争なんですけど戦争と呼ばないんですよ。近代国家になった時に宣戦布告をした後に戦うのが戦争。宣戦布告をしないで勝手に始めたのを後から国家が追認したのがシナ事変とか満州事変なんです。

今回、軍事費を倍増するとか国家予算を増やすとか、誰が決めたの？いつ決めたの？と思うんです。そうでしょ？戦前もそういう形で進めたの。で、最後に戦争になったの。動かしている人間がいるのよ。そういう意味で今の日本は食べ物もそうだけど危うい方向に動いているな、という事を、半藤一利さんの昭和史とかを読むと考えます。半藤一利、是非、読んでみて下さい。

そういうことが、先月から今月に私の中で変わったこと。

■お遍路話

で、四国お遍路に徳島に行って来たんです。凄いですね。崖のようなところにあるんです。弘法大師も偉かったけど、行基も偉かったね。行基って知ってますか？。私度僧(しどそう)といって、自分で僧になると言ってなった人で、公には認められていない僧がいたんです。朝廷は認めていない僧ですね。でも、あの人は仏教が人を救うと燃えた人だったから、あちこちに教え回って、ここに橋を作ろう、とかを全部お布施でやった。そして、見返りは求めなかった。だから全国

に支持者がいたんです。その時の聖武天皇が、東大寺を建てよう、となった時に、行基さんをお願いした、という方です。で、お遍路の 1/3 ぐらいの大元を行基さんが建てたということなんです。

あと、陰陽師という映画観たことある？日本に最初に入って来たのが儒教、その後には道教、その後に仏教。でも、日本には修験道というのがあったんです。修験道は心が広いので仏教も読んだけど、山を歩いて修行などをしたわけです。それを役小角(えんのおづぬ)がやったんです。お遍路もとんでも無いところにあるんです。普通は行けないのよ。そこはロープウェイだけでしかいけない。でも、役小角ならこんなところに作るのわかるよな、って。要するに四国は急峻なので大変だったよ。

■原産地を考慮する

ということで、話を戻しますが、先月みんなで蒔いてもらったミニトマトの 1 ヶ月後です。作物を育てるポイントですが、まず、日本人の野菜の半分は輸入品です。つまり日本の国土で育っていた野菜ではありません。なので、原産地の事を良く知ることです。種というのはその地にあった特性があるんです。例えばトマトはアンデスの山の雨が少ない荒涼とした世界。ナスは南方ですから肥沃で水がいくらあっても良い、という感じ。ところがトマトやジャガイモは肥沃じゃダメ。ほどほどで良い。痩せ地でも無く肥沃でも無いのが丁度良い。温度も大事。温室なら 8°C~9°C 以上。だから育苗する時はその温度以上。適性は 20~25°C。

節分ってあるでしょ？1 月 4 日頃から 30 日間ぐらいが寒の入り、明けるのが節分。そうすると節分の後の光線量は倍まではいかないけど、エネルギーが凄いのよ。例えばハウスの中で 12 月頃なら締め切りでも余計に温度は上がらない。ところが 2 月過ぎたら良く換気しないと一気に上がっちゃう。1 時間照った時に、冬の倍のエネルギーがハウスの中では溜まって、温度が急速に上がって小さな苗は枯れちゃう。そういうことを頭にいれて、原産地を考えながら温度も考える。冬野菜はほとんど心配する必要はありませんよ。例えば小松菜、ホウレン草は寒さに結構強いので。

とにかく原産地を考える事が大事です。我が家はトマトは 20°C。昔は温床だったけど今は電気。サーモスタップ。センサーを入れておけば 20°C を維持してくれる。でも、センサーの 20°C と作物の温度は同じじゃないですよ。作物の高さで温度計を刺しておく、と作物にとっての温度がわかる。最初は勘だからちゃんとわかったふりしないで量った方が良い。

あと、人間も植物も全く同じだと思う。生まれた時は種というのはお母さんのエネルギーです。人間で言えばおっぱいです。子葉と呼びますが、これは親の栄養です。上と下で育つわけですが、上は葉っぱで下は根っこで同時に出るんです。水分が多いと上ばかり育つんです。バランス良く出すのが良いのですが、それがわかるまで経験が必要です。

最初は根っこも葉も親の力で育つんです。でも、ある時点で親の栄養が無くなるんです。そこから自分の力で葉や根っこを出すんです。ウリ類だと葉っぱが3〜4枚出た時に自分の力で根や葉を出す。上と下のバランスが丁度よいと自立した人間が出来る。これが面倒を見すぎて肥料や水をあげ過ぎると、根っこはだらしなくて葉っぱだけ繁茂するというやつに育つ。すると大風や強い雨などでひっくり返っちゃう。人間と同じじゃない？自立できる人間に育つのが肝要なんです。まあ、私達もたまに失敗するから、そんなに気にしない方が良いのですが。

最近、若い大学生が家に来たけど、全くダメですね。知識はあるけどわかっていない。教育というのは教えて育つ事なんです。教える事も大事だけど育たないといけな。教養も教えても身につけていないと意味が無い。実際にやれと言われてもやれない。何がわかっていないかわからないから、やりようが無い。

その若者に「人のやっていることを良くみて学びなさい」と言ったら、「説教ですか？」と。「だったら俺の話聞く必要は無い」って言ったんだけど。今の人達は、まあ全部じゃないんですけど、そういう人がいるんですが、ズケズケ言われると文句を言われたと思うんですよね。我々の時代では「なんで言われたのかな？」「何かまずかったかな？」とか思ったと思うんですけどね。

人が人として育っていないんですよね。だから子育ては大事だよ。ちゃんとやらせないと。私も学者とか官僚とだいぶつきあったけど、まともかどうかは、ちゃんと体験に基づいて話しているかどうか。頭だけの人間はダメだよ。体験や経験に基づかない知識はうわべだけで役に立たないよ。私はおかげさま農場を作ったのは食べ物がどう出来ているかわかって欲しいのよ。犬や猫じゃなくて拾って食っているわけじゃないんだから、そのぐらい人間ならわかれよ、と。

最近人種が変わって来たんです。昔の話ですが、中学3年生ぐらいかな、人参を畑から引っっこ抜いたら、「人間は白いひげがあるんですね」って。「ん？」と最初どういう事かわからなかったんですが、聞いてみたら、柿が木になるように人参がなっていると思っていた、と。そんな人が出て来たんだな〜と。

20年前にも慶応と青学の学生達が「農業体験したい」という事で来たんです。農業の大切さを知りたいということで、15人ぐらい来た。体験するなら人がどう生きるかの触りもやろうよ、ということで、ご飯を炊く所からやったんです。ご飯は「炊く」というように、本来は火で炊くんです。ということで、マッチと新聞と薪を置いておいたんです。

すると、まあ、やらない人間がやりたがるんです(笑)。マッチを持って何をやったかという、ポキポキ折る。つまりマッチの力加減がわからない。経験がある人もいたので「何やってんだよ」と、その人が火をつけてくれたんだけど、今度はマッチをつけた後、薪に直接、火を点けようとするんだよ(笑)。驚きと面白かったけど、一方で深刻に感じたよ。刺身が泳いでいるとか鶏の足が4本あるとか思っている子供がいると言うけど、そういう人が増えているわけですよ。

で、ちょうどその頃、鶏を飼っていたので、夜飯で鶏を食おう、となった。親父の方が技が上だから親父にさばいてもらったんだけど、女の子は「残酷だ」とか言っていたんです。「何言っているんだ、あんたがた普段食っているだろう」と言ったんですが、「可哀想」と涙を流している女の子もいたんです。で、鳥ゴボウご飯をやった。で、「どうだ？」って聞いたら「美味しいです」って(笑)。翌日、夏場だったのでナス畑に案内したら、「ナスって大きいのも小さいのもあるんですよね」って。つまり、同じような揃ったナスしか観たことがない。育つということがわからない。これは深刻じゃない？。

最近、「幼稚園の子供達に田植えを体験させたい。年に4~5回やって受けてくれないか」という相談がきたんです。ちょっとでも自然を体験した方が良いよね。大切だよ。わかることだよ、知っているじゃなくてね。

この食と命の教室で何回も話しているけど、私達は地球の恵みで生きている。人間があるから地球があるわけじゃなく、地球があるから人間が存続できる。だからどんなことよりも地球の方が上位にある。それがこの半世紀は人間が考えたものばかりの社会になっている。自然はそんな人間がわかるものばかりじゃない。それをわかると思い込んでしまっている社会。だから養老孟司さんは「農村へ学べ」と。

決定的なのは自然からかけ離れた物を食べているのと、自然には無いものを食べている事。だから無農薬が目的じゃなくて、自然の中で自然に育ったものを戴く。自然界の途中に人間がいる。やがて死んで大地に帰り地球に戻る。今はそこ

に自然界になかったものが混入している時代なんです。

また、素養っていうのがありますよね。無着先生が「日本はもうダメになるでしょうね」と言ってましたが、日本が欧米に追いつけ追い越せという目標があった。それが追いついちゃった。その後どうしたら良いかわからないのが日本人。想像力、智慧、思いやり、人を愛する事とかは知識じゃ無い。そうなった時に自分がどうすれば良いか、そういう教育が全くされてない。誰かが作った問題にどれだけ答えられるかというのが偏差値教育。でも、そうじゃない。

日本は減点教育なんです。無着先生が言っていたのは、昔の日本はみんな師匠と弟子の関係だった、という事。例えば大工さんがいると弟子になる。親方が先生で、まずお茶くみから始まる。それも勉強。人間が何をしているかを学ぶ。させられている、という人間はダメだから弟子から外す。金槌の使い方、次はノコギリの使い方、というように加点。つまり技が身についていく。加点教育は際限が無いわけです。工芸品とかで技とかあるでしょ、そういった所では満点というのが無いわけです。

江戸時代とかは、この技を学びたいからこの師匠から学びたい、というのがあった。師匠を選べたんです。一方、師匠も弟子を選べた。それがピタッと合った時に本当の教育が起きる。だから親はある意味、先生にならなくてはダメですね。俺はなれなかったけど(笑)。子どもが悪いことしたら、それはすべて大人のまねですね。そういう世の中でありたくないけど、困ったものですね、だって子どもは真っ白ですから。

そう考えると、赤ちゃんがオオカミにさらわれた子がオオカミになっちゃった、というのがあったけど、人が人間になる間は、人間社会で育つわけです。ある意味、大人社会ですね。言葉をまず覚えますね。箸の使い方も1日3回1年やれば1000回練習することになりますね。人間は反復練習をして身につけていくことばかり。それを箸が使えないからスプーンで食べましょうね、というのがバカ親だよ。使えないから覚えさせようとするのが親なんだから。3つ子の魂100までも、というのは大切だよ。

おっぱいあげながら子守歌うたってあげるとか、それが人を愛するとか。人間に育てられたサルは子どもを育てない。子どもを産んでも育てない。自分に育てられた体験があるから子どもも育てられる、つまり親ザルから学んでいる。それが人間に育てられるとダメ。

■植物と虫

植物と害虫はセットになっている。キアゲハは人参やパセリに必ずつく。あれはコンビなのよ。ゴマを作るとゴマ虫という蛾の幼虫がつく。普段はいないのよ。でもゴマを作ると必ず来る。虫が好きな人は虫が好きな植物を知っているのよ、その植物のところに行く。キャベツを作ればモンシロチョウが必ず来る。「どこから来たんだ、お前は!？」って(笑)。チョウチョは利口で、1反歩 3000 株のキャベツ全部に見事に卵を産む。自然との戦いだよね。恵みでもあるけど(笑)。

アブラムシは増えるように出来ているんだよ。あれは全部メスなんだよ。1回に5~6匹産むんだけど、その子どもの腹の中に既に次の子どもが入っているんだよ。だから、卵で増えるんじゃないんだよ。条件が合えばあっという間に広がるんだよ。1週間に1回5~6匹産むということは、ねずみ算のように増えるわけ。

農薬の世界で言うと、殺虫剤で殺すわけ。でも抵抗性が出来るから、Aという殺虫剤が次は効かないわけ。だから試験場とかはアブラムシ駆除の場合は同じ薬を2度と使わない。次はB、次はCという薬を使え、と言われてる。だからある意味生物は死に絶える事は無いわけ。だって、1ヶ月で1万匹いて1匹でも生き残れば、子孫は続いていく。だから切りがない。それで残留したものが人間の口の中に入る。だから有機農家は時期を避けるんです。アブラムシが発生する時期には作らないとか。もう1つは肥料をやり過ぎると虫が出やすくなるんです。

生態学の先生の話では、栄養過多、窒素過多のものは虫が湧きやすい。それは虫がたかりやすい、と。つまり自然界では分解しようとする。不健康なわけだから自然界では滅する、という方向に力が働くという先生もいる。ある意味、合っている気がしますね。

農薬なんて歴史は100年無いわけ。DDTとか開発されるわけだけど、農薬が無くても人間の食糧を採れたわけ。それが近代になっていつでもカボチャが採れる、いつでもホウレン草が採れるというようにしている。無理をしている。だから虫が発生してだから農薬を使うということになる。

「※DDT」…有機塩素系の殺虫剤。戦後、衛生環境の改善のためにアメリカ軍がシラミなどの防疫対策として用い、外地からの引揚者や、一般の児童の頭髪に粉状の薬剤を浴びせたり、市街地に空中撒布することもあった。その後、農業用の殺虫剤として利用されたが、1960年代に出版されたレイチェル・カーソンの「沈黙の春」により取り上げられ、その残留毒性の危険が世界に広く広まり、日本でも1971年に使用が禁止になった。

自然界は放っておいても滅することはないのよ。草なんて嫌なぐらい繁茂するでしょ。だから自然界に対する畏敬の念をもって接するのは大事だと思います。

性質をよくわかること、気候をよくわかることだな。トマトの原産地はどこかという事を気をつけろという話をしましたが、そういう環境を保てないようなら作るべきではないと思う。

一般論で言うと、7月でも8月でもハウレン草を作りますね。でも、どうしようもないんです。旬じゃないから虫が出る。だから1週間に1回、薬をかける。あんなもの食うものじゃないと思うんです。冬場は80~90日かかるのが、夏場20日とか25日でもものになっちゃう。見た目だけはハウレン草になっているけど、内容はカスのようなもの。それに、なおかつ農薬をかけるわけだから食べるものじゃない、と私は思っている。それならモロヘイヤとか空心菜とか夏には夏に強い野菜を食べるべきだと思うんです。

■土について

土というのは鉱物が単にバラバラになったものじゃないんです。海岸の砂は土とも言えますが、それは見た目だけの事。例えば、この辺りは放っておけば草が繁茂する。それは落葉樹は葉っぱを落とす、それが繰り返されて、それらは全て土に還ってくる。1000年かけて30cmの土が出来ると言われているんです。これは耕土という話で、生き物が生きられる土のこと。

一方、砂に種を蒔いてみればわかるよ。種の力までしか育たないから。栄養が無いから。ところが陸地の土では植物が生長するから、それらが腐っていき、ミミズも行ったり来たりして土の中の栄養をかき混ぜてくれて、糞も落として、それで1000年かけて30cmの土が出来る。その1000年の土を使っているから無肥料だって一定期間は作物が作る事が出来るんです。

そういった作物の繁茂のおかげで動物は生きられる。自然界は放っておけば繁茂していくんだよ。人間が余計な事をしなければ。でも食っていかなければいけないから、大根とかハウレン草を作る。それらは放っておけば本来の自然の循環の中では腐って土に戻っていく。それを途中でとっちゃう。そのとった分を入れる、というのが堆肥なのよ。キャベツを作ったら、そのとった分だけ返せ。それが豊かさを維持することという考えです。入れすぎは良く無いのよ。

自然の摂理がそうになっているのだから、自然界の流れに人間の行為がなるべく

適用するようにするのが有機物を入れる行為、堆肥を入れる行為なんです。

一方で、化学肥料は人間が考え出した成分だけでしかないんです。窒素・リン酸・カリがあれば良いというのが化学肥料の発送です。ところが土は生きていて、銅とかなんだかわからない微量元素とかも入っている。自然界は、そういう要素が偏っていないんです。化学肥料は人間がこれでいいやというふうに決めた偏ったもの。それでダメだからといって殺虫剤とか、ごちゃごちゃ余計なことをやって、どんどん土がバランスを崩していくんです。

■人は環境で育つ

今から 40 年前に千葉工業大学の先生から聞いた話だけど、人間はおぎゃーと生まれてから環境によって育てられる、と。それで走るのが速いとか、そういうのは指の力だと言うんです。歩いていく時に一瞬、片足になりますよね。その時は指の力でバランスをとっているんだって。

で、40 年前の話だけど、千葉市内の 4~5 年生の子どもを対象に、体操の平均台あるでしょ、あの上を歩けるかチェックしたら半分が落ちちゃった。つまりバランスがとれない。

人間は無意識でバランスをとっている。赤ちゃんでおぎゃーと生まれて、歩くようになる時に、右に傾いたり左に傾いたり、時には転んだりしながら歩けるようになる。自然界なら斜面とかでこぼことかあるわけで、そこで育つ。ところが今はアスファルトがあつて平らでそこに運動靴を履いて歩く。指の力が発達しないように歩く。しかも家が畳みじゃなく板の間。外に出たらアスファルト。年中べた足で指の力を鍛える事を無くしている。なので、今のよう足になってしまったんだって。だから、その先生は「学校の全天候型を全部ひっぺ返して、砂場とかデコボコを作れ」と言っていたんです。

人間は環境で育てられる。本来、人間は地球の重力に逆らって生きているんだから、「それが指だ」ってその先生が言っていました。

「人間が生きているということは、どういうことか？」という疑問を生物学者の発想では、食べ物あるから生きていける、という話なのだけど、そのまた逆で、年がら年中、食べておしっこかうんちで排出しているわけだけど、そのままだと身体が分解されてしまうから、補充をしないといけないから、食べるというわけです。

私達の時代は 2400 キロカロリーが 1 日で必要と言われていましたが、今は身体を動かさないから、1800 キロカロリーとれ、と言われてますね。で、デンプンの主成分は炭素と酸素と窒素。お米を食べて分解して熱量として体温 37°C や運動をするエネルギーが出るわけです。でも、「そうなのかな？」と実験した人がいたんです。

アイソトープというのがあるでしょ？。それを使えば、人間が食べたものがどこに行くか追跡出来るんです。凄い時代だよ。食べたものは全ての細胞に散らばっていく。細胞レベルじゃなくて分子レベルだよ。分子レベルで細胞から古い分子は捨てられて新しい分子が入っていく、それを年中やっている。一番その代謝が早いのが皮膚。ふけが出るというのは悪いことじゃないんだよ。

細胞が入れ替わる、それが繰り返されて生命が維持される。細胞の中で分子レベルで入れ替わっている。脳の細胞や心臓の細胞は一生変わらない、と言われていきますよね、増えないから。だから心臓ガンは無いわけですよね。でも、分子レベルでは入れ替わっているんです。「※福岡伸一」さん、是非、読んで下さい。

「※福岡伸一」…1959 年生の日本の生物学者専攻は分子生物学。タンパク質など生体を構成する物質は極めて素早く入れ替わり、作り替えられていることを実証したルドルフ・シェーンハイマーの「生命の動的状態」という概念を拡張し、生命の定義に「動的平衡」という概念を提示し、「生命とは動的平衡にある流れである」と主張。『生物と無生物のあいだ』など著書多数。

食べたものはまず胃で分解される。PH1 とか 3 で少々の雑菌は殺されちゃう。人間は個性があるから、親子であろうと血液を輸血すると型が違くと死んじゃう。胃で第一消化して、十二指腸を通過して小腸でタンパク質レベルで分解する。それを今度は身体に必要なものに組み立てるのが肝臓。新しい血を送るのが動脈というが、じゃあその新しい血はどこから来るのか？という肝臓で作られる。非自己、つまり自分の身体ではないものを分解して作り直す。それで肝臓で栄養をぶっこむ。で、肺から酸素を取り込んで心臓に送りこむ。そういったことを繰り返している。それは人間がやっていることではない。だって「血液を送れ」と自分で言ってやっているわけじゃないよね。つまり生かされている。と言うことを学校で教えないとダメよ。無農薬とかは横にいったん置いておいて、そういうことを学校で教えないとダメよ。

■人生で自分で決める事

人生でどうしても決めないといけないことが 3 つある、と出てきました。ま

ず、誰と生きるか。次に、どこで生きるか。最後に何を仕事とするか。でも今は1/3 ぐらいが離婚する。俺からすれば自分で決めた事ぐらいは全うしろ、と。俺の仲間が昔、女を作っちゃったのよ。そして家に帰らなくなってしまった。で、周りが騒いで、そこの奥さんも「うちの父ちゃん、どこにいったか探してくれ」となったので、みんなで探してようやく見つけたんです。

そして、「自分のおっかあを大事に出来ないでどうする！」とみんなで説得したんです。すると「いや、今更、帰れない。おっかあを裏切ったんだから」と言ってね。そうしたら偉かったね、その母ちゃん。「じゃあ、私が行く」と言って、自ら出向いたんです。で、「父ちゃん、うちには子どもがいる。父ちゃんがないとだめだ」と説得したんです。そうしたら、その親父が「でも、借金が200万あるんだよ」と。すると、母ちゃんが「じゃあ、一緒に働いて返すべ」って。立派な母ちゃんて偉かったな〜。それでなお偉いなと思うのが、その母ちゃんは決して偉ぶらなかったんです。父ちゃんを立てるんです。自分が出しゃばるということを一切しない。今はすっかり母ちゃんの言いなりです(笑)。でも、本当に偉いな、と。

もう一つ例を話すと、村に飲んべえでどうしようもない奴がいたんだよ。みんなが「離婚した方が良いよ」と言うぐらい。そうしたらそこの母ちゃん、「でもよ、子どもがいるんだよ。父ちゃんとはっかえられないんだよ」って。で、母ちゃんが一生懸命働いて3人を育てあげたんです。父ちゃんはずっとダメで墮落したまんま。でも、長男が偉かった、家も建て直した。子供が母ちゃんを見てみんな立派に育ったんです。あの母ちゃんは偉かったな。

俺は自分で決めた事を全うしろよ、と思うのよ。一生大事にする、という誓いは嘘だったじゃないかって。でも、キリスト教でもないのに教会で誓っているんだから、約束破っても仕方無いのか(笑)。

昔は旦那がいたんです。旦那はダーナという仏教用語が元なんです。旦那寺、檀家というでしょ？。旦那は寺を面倒を見て檀家は寺を面倒みる。つまり、旦那というのは面倒を見る人という意味なんです。例えば自分の家族がいて色々やっているかもしれないけど、その人達を面倒見るのが旦那。家制度というか家族を大事にする思想。今は自由だといって勝手にやっているけど、どうなんでしょうね。